パラオ国アンガウル島における日本語の使用

ダニエル　ロング・今村　圭介

1.　本論のきっかけと問題の所在

本論では、旧南洋群島であるパラオ共和国アンガウル島における接触言語「アンガウル日本語」（AJ）の存在を指摘し、その特徴や社会的・歴史的背景、さらには接触言語学的な分類について考察する。パラオは、戦前に日本語による教育が行われていたため、老年層に流暢な日本語話者が存在する。こうした残存日本語は他の地域でも研究がなされており（簡 2011、ロング・新井 2012）、また旧植民地におけるクレオール化の研究も進んでいる（真田・簡 2008）。筆者らはパラオにおいて残存日本語の調査を行なっており、調査の過程で、パラオの離島であるアンガウル島では戦前世代だけでなく、戦後世代でも日本語が話せるという情報を得た。科学的なデータやはっきりした基準があったわけではなく、あくまでも印象に基づいた非専門家の「話せる」という評価であったが、複数の住民から証言を得た。そこで、日本語話者数の誇張やその日本語能力の過剰評価があったとしても、そもそも「アンガウル島民は日本語が話せる」という評判の発端はどこにあるか調べる必要があると考え調査に至った。

現地調査に基づいた分析、参与観察、面接調査に加えてアンガウルを離れてコロールに移り住んでいる島民も多数調査した。調査の目的は以下の 2 点にあった。(1)アンガウル島民がどのような日本語を話しているか。特に戦後育ちの島民で、日本滞在経験もなく、日本語学習経験がないパラオ人が日本語を使っているか。(2)そうした「アンガウル日本語」は言語学的にどのような言語変種（ピジン、クレオー ル、混合言語、中間言語、など）として分類されるか。

本稿の論考は以下の順で行なう。第 2 節ではこの言語変種ができあがり、使い続けられてきた社会的環境として、アンガウル島の戦前、戦後の社会的状況を概説する。第 3 節では参与観察と聞き取り調査のデータを分析して、アンガウル島民の日本語能力を記述する。第 4 節と第 5 節で二人の話者が使用する日本語の言語特徴をケーススタディとして分析する。最後に第 6 節では、アンガウルで話されている日本語をどのような接触言語として分類できるかについて考察する。

2.　アンガウル日本語の歴史的・社会的背景

ここで当該地域の地理的、歴史的背景について考察していく。アンガウル島はパラオ共和国に属する離島であるが地理的に隔離されており、他州の状況とは異なる。パラオの中心はコロール島とその北にあるバベルダオブ島であり、現在この二つは橋で結ばれているため交通が容易である。その他の有人島もほとんど一つの巨大なリーフ（周囲 298 キロの珊瑚礁）に囲まれているため、海が穏やかで行き来が容易である。一方、アンガウル島はこの巨大なリーフの外側にあるので、外海に出なければならず、悪天候で定期船が欠航になることがしばしばある。海が荒れていなくも、コロールか

ら64キロ離れているため、アンガウル州政府が運営している定期船（月に5回のフェリー）で3.5時間かかる。つまり、アンガウル島はパラオに属しながらもかなり孤立しているのである。そうした地理的背景から、パラオのその他の島とは異なる歴史と社会状況が見られる。さらに以下で説明するように、戦後に日本人が居住していたパラオ唯一の州でもあった。

20世紀の間は、アンガウル島は絶えず、多言語社会であり続けたと言える。ドイツ時代からヤップのウルシー環礁やそれぞれの離島から男性が労働力として強制移住させられ、家族の女性も連れて行かれた（Isaac Langal 2003）。日本時代にもヤップ人が労働者として住んでいたことが分かっており（Manuel 2003）、またサイパンの人々がアンガウル島で生活していたため、彼らが暮らしていた地域は地図に「サイパン村」と記されている[1]。さらに、日本がパラオを統治し始めた1914年から日本軍が配置されていたが、その後日本人の入植者が増加し、1932年の統計によると、アンガウル島の住民975人のうち、日本人は約3分の1弱を占めていた。聞き取り調査をおこなったHorace Rafaelによると、戦後にはチューク人が労働者としてアンガウルに滞在していた。戦前・戦後ともにアンガウル島では、日本人との会話のみならず、パラオ語を母語としない者同士の共通言語（リンガフランカ）として日本語が用いられていた。

第2次世界大戦が終結するとともに日本人は島から帰還することを余儀なくされたが、燐鉱石の採掘のために1946年5月に再び居住し始めた（Wahl 2000:111-112）。1946年7月に150人の労働者が到着し、その後9月、10月にそれぞれ170人の労働者が到着した(Palau Community Action Agency 1973:482)。つまり、最終的にアンガウル島に居住する日本人は500人まで増加した。移住初期は、日本人は燐鉱会社の敷地内にある寮に居住し、外に出ることが制限されており、アンガウル島民の女性もまた寮に出入りすることを禁止されていた（Wahl 2000:137）。寮での食事は限られているため、寮の外に出て他人の家の作物を盗み食いしたことが理由だった（Wahl 2000:113,141）。しかし、時が経つにつれてその様な制限が緩くなったようである（Wahl 2000:137）。人口密度が比較的高かった当時の状況で（150 人/㎢）、交流は自然に増えていった[2]。アンガウル島内のアンガウル州資料館には、日本人とパラオ人の当時の交流の様子の写真が展示されている（図1,2）。このようにパラオのその他の島とは異なり、戦後直後も日本人が居住していたアンガウル島では、日本語の使用頻度が高かったことが容易に想像できる。1956年までアンガウル島に住んでいたToshiwo Akitayaによると日本人の燐鉱石事業が1955年まで続いた[3]。

日本人が居住していた当時は、パラオの他州に比べて日本語を使用する機会が多か

---

[1] なお、ヤップ語はパラオ語と同系統だが、相互理解があるほど似ていない。

[2] アンガウル島の面積は8㎢で、1947年当時の人口は1200人程度であった。

[3] Rechebei & McPhetres (1997:214)には、日本人がアンガウル島にいたのは1952年までと書かれている。しかし、筆者の聞き取り調査では複数のアンガウル島出身者が1955年や1956年と語っている。歴史学で言う「一次資料」はまさにこうした経験者の証言だと言えるので、本稿でそれらを重視した。またArnow, (1961:12)などの文献においても日本人が1955年までいたと述べている。

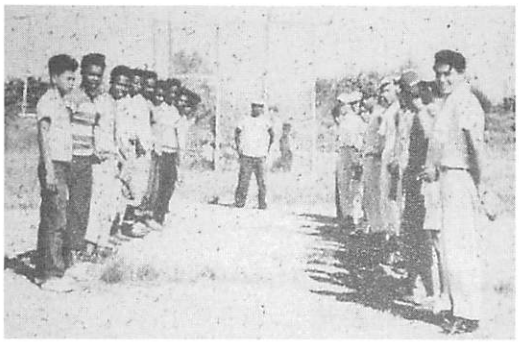

図 1 パラオ人と日本人労働者の親善野球
(State Museum of Angaur)

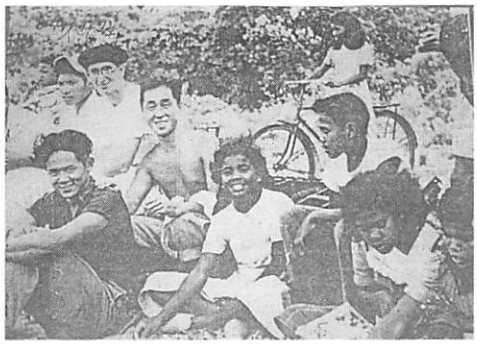

図 2　パラオ人と日本人労働者との交流
(State Museum of Angaur)

ったことが明らかである。また、2013 年 3 月 16 日の調査で得たアンガウル島民の Leon Gulibert 氏の証言によると、アンガウル島には 1960 年代から日本人の退役軍人などの観光客が来ており、80 年代、90 年代が日本からの観光客が比較的多かったようである。人口が少ない島への日本人観光客の訪問は当然日本語での交流を産んでいた。正式な宿がない島では当然かもしれないが、それぞれの島民の自宅に招いていたようである。つまり、日本人が帰国した後も継続的に日本語を使用することがあったと考えられる。複数の文献（Palau CAA 1973; Wahl 2000; Rechebei et al. 1997）や聞き取り調査の結果を総合して図 3 で示す。

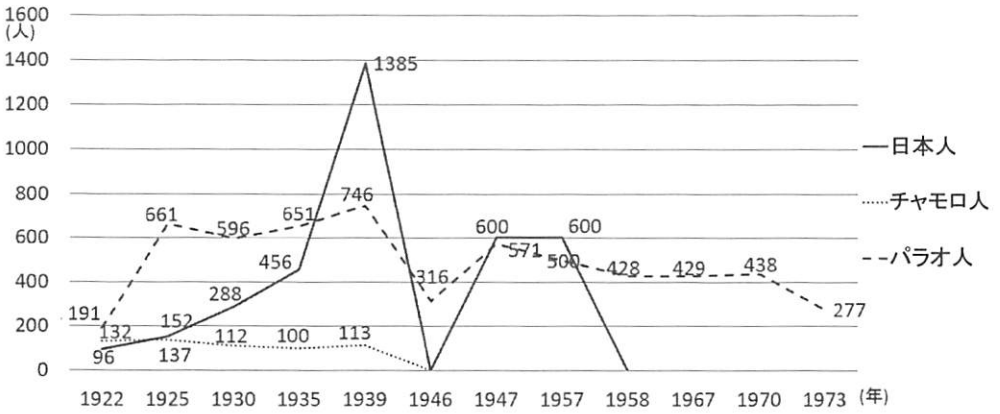

図 3. アンガウル島人口の推移

現在、統計上の「アンガウル州」の人口は 300 人程度となっているが、長期間離れて暮らしている人が多く、300 人も住んでいないのが実情である。日本人は派遣ボランティアが 1 名住んでいるのみであり、観光客はほとんど来ることがなくなったという。なお、アンガウルにおいて日本語がいかに重要な位置を占めているかを象徴する

のはその州憲法における公用語として日本語の制定である。詳細についてはロング・今村（2015）を参照されたい。

3. 戦後世代の島民の参与観察調査

3.1. アンガウル日本語の理解・産出傾向

本調査ではアンガウル人、5名の男性（後に頭文字と生年を記す）を対象として、日本語使用の聞き取りを行った。T(1943)、H(1959)、M(1948)に対しては面接調査、G(1956)に対してはバーにおける対面調査、L(1961)に対しては島内のツアーをお願いした中での聞き取り調査を行った。なお、Hに対する調査はコロールで行い、その他の話者はアンガウル島内で行った。戦後直後の労働者との接触があったと考えられるのは、TとMでG、H、Lはその後断続的に訪れた日本人、島外での日本人との接触、両親の日本語使用による日本語を習得したと考えられる[4]。調査の結果、日本語の理解・産出能力はHが一番高く、次にL、そしてT、M、Gという順番であった。そのため、本節でまずT、M、G、Lの日本語について考察した上で、次節にHの日本語の考察を行う。

3.2. Mの場合

Mは、「夜」、や「おはようございます」、「どこ行くの？」「飲んで？」といった日本語を発している。缶ビールを手に近づいて来て、「飲んで？」と調査者にと言うが、使用していた上昇イントネーションから、意図していた意味は依頼・命令というよりは「飲んでいる？」または「飲む？」という疑問文だったことがわかる。すなわち、彼は「飲んで」をチャンクとして覚えているだけで、活用形が作れない。

また、調査団が彼の髭について「何年伸ばしているんですか？」と聞いたところ、適切な返事を英語で得たが、「お父さんはパラオ語を話しましたか？」という質問は通じなかった。本人に対してではなく、第3者について尋ねているという点や、現在ではなく、過去のことについて尋ねる場合は難しいようである。「here-now statement」、つまり目の前にあるここと今に関する発言はそうでない発言に比べて第二言語話者に通じやすいと言われる(Krashen 1982:23-25)が、その傾向が見られた。

3.3. Gの場合

G氏は挨拶ことばのような定型表現だけではなく、アンガウルに何があるかを尋ねた際に「猿がある」、「パパイヤの無いよ」と答えるように、その会話の流れに合った日本語の表現を使っている。なお、パラオ語には、“mondainai”（問題ない）という句が借用語になっており、同義の表現“diak a mondai”と双方が使用される[5]。そのため

---

[4] Hは「両親が子供に聞かれたくない話をするときに日本語を使っていて、それから覚えた」と述べている。同様に戦前生まれのパラオ人が秘密話に日本語を使うという話はよく聞くが、そこから日本語を覚えたという話は聞かない。実際にどの程度、その影響があったのかは定かではない。

[5] “mondainai”以外にも、”churenai”（売れない），“chauanai”（合わない）など、否定の「ない」

「ない」の意味が多少推測できると考えられる。有情物に「いる」ではなく、「ある」を使用する点や、助詞の「の」と「が」を混同する点は第二言語話者に広く見られる誤用である。しかし、同時に、Gは単語のみのコミュニケーションだけでなく、文の機能語を含めて発話をしている。教室学習はしていないため、簡単な挨拶言葉以上を自然習得している様子がうかがえる。

3.4. Tの場合

Tは「あなた名前は？」、「わたし、Tサン」、「あなたビール飲む？」「つかれなおす」、「日本人話す」、と言った発話をしている。「あなた名前は？」で「の」が抜け落ちているはやや気になるが、日本語でも有り得る発言である。「私、Tさん」では自らの名前に敬称のサンをつけている[6]。「飲もう」と誘う時や「乾杯！」という場合に、「つかれなおす」はパラオ語でも借用語として使用されている[7]。「日本人話す」は「日本語（を）話す、日本語が話せる」という意味合いで用いられている。つまり、「Japanese=日本人、日本語」という英語との意味領域のずれに起因する誤用である。パラオ語では日本語＝tekoi er a Siabal であり、日本人＝rechisiabal であるため、パラオ語からの干渉ではないことは興味深い。Tの日本語の使用は「一語文」の発話がほとんどで、一語でなくても知っているわずかな単語をつなげていただけの発話であった。しかし、コロールでは片言であっても、上述のように日本語を使おうとする話者に出会っていない[8]。

3.5. Lの場合

アンガウル人の中には英語が不得意な人も少なくないが、Lは英語が流暢に話せる。そして筆者（今村）が英語を話せることを知っていたにも関わらず、日本語の語句を使うこともあった。Lが汎用していた表現は「行こう？」である。日本語と同じ勧誘の時もあったが、上昇イントネーションを伴い、むしろ「行きますか？」という疑問文で使う時もあった。

Lが3日間の会話で自発的（調査団が質問に用いた後ではなく）に使った単語には例えば、「蟹、頭、教会、夜、中、猿さん、三人、暑い」などであった。これらの単語はパラオ語の借用語になってない。Lの発音はほぼ日本語のままであった。一方、パラオ語の借用語からの影響で「大丈夫」や「ゴミ捨て場」の発音がそれぞれ[daidʒop]

が語の一部としてパラオ語に入っている。「ない」の単独の使用は調査中である。

[6] 「～さん」と敬称を日本語と認識しながら、自分の名前に付ける発言は日本語を知らないコロールのパラオ人からも聞く。戦前に名付けられたパラオ人には「さん」が名前の一部に組み込まれ、現在も"Katosang"などが残る。

[7] 「つかれなおす（"tsukarenaos"）」はパラオ語に入った日本語借用語（からの造語）であり「仕事帰りに軽く一杯お酒を飲む」という意味である。つまりTは、単語が日本語起源である事は認識しているが、それがパラオ語化した語であるという認識は持っていない。

[8] 筆者はこれまで、2008～現在までにかけて、複数回（ロング9回、今村5回）の2週間ほどのフィールドワークを行っている。

と[komisteba]となっている（なお、「捨て場」は現在までパラオ語としての使用は確認されていない）。「蟹」や「頭」、「教会」は具体名詞で「指をさして説明できる」単語で比較的に学びやすい。これらに比べて、夜になればマングローブ蟹を捕りに行くという話で出て来た「夜」、あるいは袋の中に蟹が入っていると言った時の「中」は抽象的な概念である。L のような戦後世代のアンガウル人は日本語を計画的に教わっていないが、バイリンガルである戦前世代の話者から多少の習得が起こっていると考えら、こうした伝承が抽象的な概念の習得を可能にしたと考えられる。L は「教会三人ある」と表現しているが、これは「サンニン」を「三つ」という意味と勘違いしていることに起因するであろう。L が使う「サルサン」はチャンクとしての使用だと考えられる。アンガウルには 20 世紀初頭にドイツが連れて来たサルが野生化している[9]。

参与観察の中で、L に通じた日本語の質問は、「ここは何ですか？」、「大きいですか？」、「蟹を捕まえた？夜に」、「パラオ人はこの時間は何をするんですか？夜は？」「アンガウル人は何の仕事をしてるんですか？」、「灯台では水は使うんですか？」などがあった。見ての通り、ヲ格以外にもニ格やデ格が入った文にも答えている。

L の口から複雑な文や動詞・形容詞の活用が絡んでいる発話は見られなかった。しかし、L はけっして「物の名前」になっている名詞のみを使っているだけではないことが以上の例から分かる。

4. H のケーススタディ

以下は、1959 年アンガウル島生まれの話者 H のケーススタディである。H は他の話者に比べ、日本語能力が高いため、本節で詳細を考察する。H は炭鉱で働く日本人が引き上げた後に生まれたため、両親や島の大人の日本語の会話を聞いて日本語を習得してきた。以下では、2012 年 8 月約 40 分間の面接調査から得られたデータを分析する。話者 H が 40 分間続けて、日本語で会話を続けるのが困難であるという理由で、インタビューはロングが英語で、今村が日本語で行った。この会話から、H の日本語の産出・理解について分析する。

4.1. 理解

H は細かな文法の機能を理解するより、文脈に依存して、質問の核となる単語を聞き取り、質問の大意をつかむこと(skimming)によって日本語を理解しているようである。そのため、文脈依存度が高い文は多少複雑になっても理解するが、文脈依存度が低い文は簡潔な文でも理解できない場合が多い。以下の例文 1~4 は H が理解した文である[10]。

---

[9] なお、パラオ語の日本語借用語の中では、敬称がそのまま単語の一部として使用されるものもある。一般名称には鳥の iakkotsiang（やっこちゃん）や daikusang（大工）が見られ、本来別の形態素だった敬称のチャンやサンが融合している。

[10] 例文によっては適当に相槌をうっているように見える部分があるが、実際に理解していることは話の流れで確認できている。

例文1は、比較的文型が簡単で、単純な質問である。この質問は問題なく理解できた。例2は「どこに学校があった」という文脈の流れでの筆者らの Yes-No 疑問文であり、Hはこれを正しく理解できている。例3は「アンガウルの農作物は全てサルが食べてしまう」という話の流れでの断定文の確認要求であるが、これも正しく理解されている。文脈に依存している質問は理解していることがわかる。例4でも、「何匹」という理解できないと考えられる語句が入っているが、結果的には理解している。「何匹」が分からなくても、「猿」「いる」という単語と疑問文というだけで、文の意味の推測が可能であり、文脈からの推測も可能だったと考えられる。

逆に理解されなかった文は、以下の例5~7のような例である。例文5では、「台湾の人は生きたままの猿の頭を切って脳みそを食べる」という話（英語で述べられた）の後の筆者（今村）の質問である。筆者（今村）は日本語の発話を引き出すために、内容の確認として、「何を食べるんですか」と聞いている。その返答として、「スプーンで食べる」と述べているのである。文脈では、すでに「何を食べるか」を述べているため、質問が来るとしたら、「何で」である。そのため、文脈に依存した形で、「スプーンだよ」と述べているのである。

例文6は、一連の話が終わった後に、新たな話題として質問をしている場面である。そのため、文脈に依存して理解することができず、質問に適切に答えることができなくなっているのである。同様に、例文7は同じように課題の変わり目での質問であり、文脈依存が低い。すなわち文脈から発話の意図を推測することが難しい場面であり、Hは繰り返し質問しても理解ができていなかった。

1. R：Hさんは何歳ですか？
   H：Fifty three.
   R：ああ、五十三歳。
   H：ごじゅうさん。Very old, uh, . . .
2. R：アンガウルの学校行ったんですか？
   H：アンガウル学校。はい。
3. R：（アンガウル島民は）全部コロールの物食べてるんですね。
   H：はい。はい。
4. R：猿は何匹いるんですか？
   H：ああ、too much！
5. R：[猿の] 何を食べるんですか？（誤解）
   H：スプーンだよ！
6. R：今何人います？アンガウルに。（誤解）
   H：今アンガウルに仕事はない。
7. R：いつまでアンガウルにいたんですか？
   H：Huh?

まとめると、H 理解できる語彙・表現が少ないにも関わらず、文脈に依存して推測を働かせて日本語を理解することが可能である。限られた語彙で繰り返し日本語によるコミュニケーションをしたことでこのような能力を身につけたと考えられる。

4.2. 産出の特徴と誤用傾向

以上で H の日本語の理解傾向を考察してきたが、以下では H の産出に関して考察していく。H の産出は限られており、例 8 のように英語と日本語が入り混じる発話もしばしば見られる[11]。その中でも多様な文法項目を使っていることが観察される。話者が使った文型を記述すると表 1 のようになる。

8. Before... 今できる飛行機（飛行場）Japan アンガウル length. More 長い More 大きい than Airai Airport. （中略）It is almost 7000 feet. Airai is only 6300.

表 1　H の産出した文法事項のリスト

産出した文法事項
a) 形容詞＋「です」文（正用）
b) 終助詞「ね」（正用）
c) 程度副詞＋形容詞（正用）
d) 主語＋「は」＋動詞（正用）
e) 形容詞＋「じゃない」（誤用）
f) 名詞「と」名詞（正用）
g) 存在文（名詞＋「が」＋「ある」）（正用）
h) 存在文、否定（場所＋「に」＋名詞＋「が」＋「ない」）(正用)
i) アスペクトの過去形「ていた」（正用）
j) 名詞接続「と」（誤用）

表のように、誤用を含めてみると H の産出した文法事項は、あまり高くない語彙・表現の理解傾向に比べてみて、多様であると言える。つまり、日本語を理解できるため、一つ一つの文法事項を暗示的に学習している。その点は、ピジンよりも複雑であり、日本語をある程度自然習得することができる環境にいたということが推測できる。以下、産出に関してどのような特徴があるか詳しく考察していく。

例文 9 の「すごいじゃない」は「すごくない」の意味で使われている。すなわち、文法的に不正確と言え、彼は「形容詞の否定表現」を使おうとしていることが明らかである。例文 10 は、パラオ語に入った日本語借用語 “sabiter” をそのまま使用してい

[11] この発話の意図は「昔、今できている飛行場は日本ーアンガウル便に対応できる長さの滑走路。アンガウル飛行場の滑走路はアイライ飛行場の滑走路よりも長く、7000 フィートあるが、アイライは 6300 フィートしかない」。つまり、この「飛行機」は「飛行場」の間違いだと思われる。

るのであると考えられる。つまりアスペクト表現に関しては、それが習得されているのではなく、語のまとまりとして出現するのみである[12]。例文 11 のように、H は調査者が「話していた」というアスペクト表現の過去形で質問しても答えは単なる過去形の「話した」と述べている。ここでは、アスペクト「ている」を使った方が、より自然になる文脈である。つまり、アスペクト表現は習得していないと言える。

例 12, 13 は接続助詞「と」の誤用例である。例 12 では、2 つの助詞を一緒に使う「はと」の使用が見られる。間にポーズが入っているわけではないので、途中で言い直しているわけではない。この「と」を英語の "with"（あるいはこれと似た構文のパラオ語）のつもりで使っているのではないかと推測される。英語なら、"I was with two Japanese"となるからである。例文 13 は「ハワイの大学」というべきところで「と」を使用してしまっている。ピジンなどの単純化された接触言語によく見られるパターンは、内容形態素が並べるだけで、機能形態素が抜け落ちている場合が多い。しかし、H の話す日本語には助詞など機能形態素がよく現れている。上の「と」もこれに当たるし、次の例 14 の主題化の助詞「は」もこれに当たる。なお、アンガウルで野生化している猿は作物を取ってしまうので人間に残されているのは魚だけで島民は苦労している、という内容の発言である。

9. R：両親から学んだんですね。すごいですね。
   H：すごいじゃない。
10. H:I feel またな、アンガウルはだめだなぁ。People live は頭ない。少し（skos）錆びてる。
11. R：（アンガウル人は）日本語話していたんですか？
   H：日本は話した。Speaking Japanese.
12. H：Yeah, I go to Hawaii. Then I got to Yap. You know underwater diving? 私はと二つ Japanese... 三井 Company, but this company subcontract 三井.（意訳：私は二人の日本人と日本企業に勤めていた。三井の下請け会社。）We build big 波止場, big 波止場 there.
13. H：Uh. I went to school in Hawaii. 大学とハワイ。ああ、Nineteen seventy seven.
14. H：Only the fish, we can take the fish. I hope the... アンガウルは苦労だよ。本当苦労。

4.3. 母語の影響

以下では、H の AJ における母語の影響を記述する。全ての語順が間違った語順ではないが、H の発話には、母語の影響による語順の違いが見られる（例文 15 と 16 は 2011 年 3 月 22 日採集）。

[12] このようなアスペクトがそのまま入った表現は他に、angsingsiter（安心してる）, chatter（合ってる）などがみられる。形態素レベルに分けられることなく一つの単語としてパラオ語に入っている。

15. R：日本語分かりますか？
　　H：私 話す 日本語。
16. R：彼は頭が良いですよね。
　　H：同じと私。

例文 15 と 16 はもちろん日本語としては誤用であるが、中間言語または自然習得のデータとしては非常に興味深いものである。このような誤用が生じた原因として次の 3 つの可能性が考えられる。

（ア）戦後のアンガウルでは、戦前に日本語を習っていた人たちは「私は日本語が話せる」や「私と同じ」のように正確な日本語を話していたが、それを聞きながらもこの話者のように戦後生まれの島民は母語であるパラオ語からの言語干渉によってこうした誤用が生まれた。

（イ）上の（ア）とほぼ同様なことであるが、言語干渉は母語のパラオ語によるものでなく、話者にとって第 2 言語である英語によるものである。

（ウ）誤用はこの話者の頭で起きたのでなく、彼が耳にしていた日本語はすでにこうした間違った形になっていた。誤用を作り出したのはむしろ、戦前の日本語教育経験者である。

なお、これまでの調査でこのように語順が間違っている日本語を使う戦前生まれの話者には出会ったことがないことを考えると、（ア）や（イ）が原因ではないかと考えられる。例文 1,2 の語順はパラオ語と似ているので、その影響を受けていると考えるのが普通である。例の語順は日本語の SOV の語順ではなく、パラオ語と同じ SVO の語順になっているので、母語の干渉と考えられる。また、話者 H の第二言語である英語も SVO なのでその影響も十分に考えられる（表 2）。

表 2. H の産出文の語順対応関係

パラオ語	Ak melekoi a tokoi er a Siabal	Ng di osisiu ngii me ngak
パラオ語の逐語訳	私　話す　言語の　日本	彼だ 同じ 彼と 私
アンガウル日本語	私 話す 日本語	同じ と 私
英語	I speak Japanese	Same as me

さらに、テンス（時制）にも不自然さが感じられる（例 17）。これは、文法的テンスを示すことが義務的ではないパラオ語の影響だと思われる。「電気あるよ」も「電気ない」も昔のことなので、「電気あった」、「電気なかった」と言うところだが、テンスが現在形になっている。この点は、先の例 12 の英語の発話も過去のことに関して go が使用されていることを考えると母語の影響が出やすい点だと考えられる。

17. H: 1957 the last ship left.　1957, when they left, we still have power, a lot of diesel left

over. So Angaur was still 24 hours 電気あるよ。Koror was until midnight Angaur was like a city before.（2 分後）Before, only Airai to Koror 電気もあるよ、電気。All Palau は電気ない。

母語の影響など、中間言語的な特徴は、Long・Imamura (2013)で考察した、パラオにおける一般的な第二言語としての日本語話者と共通する部分が見られる。しかし、語順の問題や接続詞「と」の問題など、他のパラオの日本語話者には見られない特徴があり、文法の再構成が大きく行われている点が異なっている。

ここまでの考察は以下のようにまとめられる。H は第二言語環境でも学習ではなく、周りからのインプットによって日本語を覚えたため、このような特徴の日本語を話していると言える。

A) 文脈に依存した高度な日本語を理解する
B) 多様な文法事項を使用する
C) 語彙・文法事項に中間言語的特徴が見られる

4.4. アンガウル日本語の特徴のまとめ

アンガウル人の日本語能力は簡単な挨拶や単語の発話からある程度の会話ができるものまで、様々であったが、パラオ国内のコロールやその他の地域とは異なり、自然習得による日本語話者が見られる。コロールなどでは、戦前世代の日本語が話せる話者、日本で仕事をした日本語が話せる戦後世代、日本語が話せない戦後世代しかいない。このような関係をまとめると、表 3 のようになる（自＝自然習得による言語能力、学＝学習による言語能力）。

アンガウル人は、面積、人口ともに小規模の離島において、日本人との接触が戦後まで続いた特殊な地理的・社会的要因から日本語を自然習得している。筆者らの調査ではパラオ語には 1000 語近くの日本語借用語が見られ、知っている借用語を足がかりに、日本語のコミュニケーションを個々に構築して行ったのではないかと考えられる。日本語借用語でない語の使用も多くみられ、特に L と H は筆者らと簡単な会話ができる日本語能力をもっていた。

その特徴としては、申し出の意味で使用する「飲んで？」や、提案の意味での「行こう？」など、限られた形に別の意味を付与させる点や、母語の干渉が大きくみられる統語構造などがみられた。つまり、学習をしていないために、大きく中間言語的な特徴が見られると言える。

表3. アンガウルの話者とコロールの話者の日本語レベル

ﾚﾍﾞﾙ	理解	産出	ｱﾝｶﾞｳﾙ	ｺﾛｰﾙ
1	挨拶程度	挨拶程度		自
2	単語レベル	単語レベル	自	
3	文レベル	単語レベル	自	
4	文レベル	文レベル	自	学
5	段落レベル	文レベル		学
6	段落レベル	段落レベル		学
7	複段落レベル	段落レベル		学
8	複段落レベル	複段落レベル		学

5. アンガウル日本語の接触言語としての分類

以下では、AJの使用者が日本語を習得した状況が他の接触変種(中間言語、ピジン、クレオールなど)の状況とどう違うかを論じる。ここでは、その言語が母語となっているか(表内ⅰ)、その言語が母語話者環境で習得されているか(表内ⅱ)、教室学習があるか(表内ⅲ)の点から考える。

まずAJはピジンとの共通点もあるが、重要な違いもある。19世紀の横浜など開港場で使われていたいわゆる横浜ピジンと比べてみよう(カイザー2005)(表 4③)。両方ともに母語とはなっておらず、使用する話者にとって第二言語に当たる。両方は教室で覚えたものではなく、自然習得によるものである。相違点は、それぞれの言語が話されている地域に上層言語の母語話者がいたかどうかである。19世紀の横浜ピジンの場合、上層言語に当たる日本語を母語とする人はもちろんいた。一方、現在の中年層AJの使用者が日本語を習得した時代は日本人が島からいなくなっていた。この点、AJはピジンと大きく異なるのである。

なお、表4で現していない違いもある。表のプラスとマイナスは基本的に取り上げている接触言語を区別するために必要最低限の要因である。横浜ピジンの場合、英語(基層言語)と中国語(基層言語)を母語とする人がいたが、彼ら同士が話すときに日本語を使っていた。典型的なピジンの場合は、こうした基層言語話者同士による「第三者使用」(tertiary usage)が見られる。しかし、戦後日本人がいた時期(1950年代)はパラオ人と日本人の2グループで「第三者使用」の状況は限られていた。1960年からパラオ人のみになったため、さらにこの状況から遠のいていったのである。

ピジン以外の類の接触変種(中間言語、クレオールなど)とAJはどう異なるだろうか。まず、JFL環境の学習者が話す日本語は、教科書などを用いた教室(個人)学習が中心になっていることが一般的である(表4④)。また、JSL環境の学習者は必ずしも教室学習をするわけではないが、母語話者環境にいるという点が大きな違いである(表 4⑤)。AJとクレオール(宜蘭クレオールなど)との違いは、大きくそれが母語になっているかである(表4⑥) 最後に準クレオール(creoloid)との違いだが、実はこれまでの言語接触論では「準クレオール」という用語を使って二つのかなり違う現象が語られることがあった(Trudgill 2002)。そのため本稿では準クレオールを「ア

フリカーンス語型」と「シンガポール英語型」の二種類に分けて考察する（表 4⑦と⑧）[13]。アフリカーンス型準クレオールはクレオールと同じく母語化しているため、AJ とは異なる。さて、表だけを考えれば、⑧は AJ と同じ「－」「－」「－」になっている。しかし、二つの言語変種の違いは、言語能力の高さにある。シングリッシュは（主流英語との相互理解の問題はともかくとして）、社会生活の中でかなりのコミュニケーションが可能な高度な変種である。一方、AJ はコミュニケーション手段として利用価値が低く、非常に制限された言語変種であると言える。

表 4　アンガウル日本語と接触言語変種の比較

	i 母語	ii 母語話者環境	iii 教室学習
①アンガウル日本語（準ピジン）	－	－	－
②ネイティブ日本語	＋	＋	＋
③横浜ピジン	－	＋	－
④JFL 中間言語	－	－	＋
④JSL 中間言語	－	＋	±
⑥クレオール	＋	－	－
⑦アフリカーンス語(Afrikaans)型(母語話者型)準クレオール	＋	－	＋
⑧シンガポール英語（Singlish）型(非母語話者型)準クレオール	－	－	－

6.　まとめと今後の課題

以上で 5 人のアンガウル島の話者への調査から、その特徴を考察し、他の接触変種との共通点・相違点について比較考察した。結果として、程度の差は大きいが、AJ の話者はパラオ語内の日本語借用語も使用しながら日本語によるコミュニケーションをしていることがわかった。また、アンガウル日本語（AJ）はこれまで注目されてきた接触言語には、いずれにも当てはまらないことがわかった。

日本語学や言語接触論の分野において「アンガウル島日本語」の実態解明は意義の大きい研究課題であり、この研究成果の一環として、「ピジン」や「クレオール」、「中間言語」といった従来の概念とはまた違う新しい言語変種を考えなければならない。

アンガウル日本語とピジンとの関係は、クレオールと準クレオール（creoloid）との関係に似ているので、pidginoid（ピジノイド、準ピジン）という名称を提唱する。

[13]準クレオールと普通のクレオールとの違いは言語構造の再構築（restructuring）の度合いによる。準クレオールは「ある程度」文法が再構築されているがクレオールほど劇的ではない。

謝辞

本研究はJSPS科研費基盤研究（C）24520502「ネイティブ不在地域で発生した新型接触言語—『アンガウル島日本語』の調査研究—」（研究代表者ダニエル・ロング）の助成を受けたものである。The authors thank the following for their help in researching this paper: Victorio Ucherbelau, Toshiwo Akitaya, Sabeth Vereen, Maria Gates-Meltel, Takashi Takami, Thomas Moses, Leon Gulibert, Masaharu Tmodrang, Momotaro Timothy Ueda Rafael, Junko Konishi, Hironobu Yamagami, and Yumiko Sugawara and Youji Kurata who first alerted us to the importance of Angaur. We dedicate this paper to the late Horace Rafael, governor of Angaur 2000-2009 and Angaur delegate to Olbiil era Kelulau 2009-2013, who helped us understand his island home and charmed us with his humor.

参考文献

カイザー、シュテファン (2005)「Exercises in the Yokohama Dialectと横浜ダイアレクト」『日本語の研究』1(1), 35-50.

簡月真 (2011)『台湾に渡った日本語の現在』明治書院

真田信治・簡月真 (2008)「台湾における日本語クレオールについて」『日本語の研究』4(2), 69-76.

ロング、ダニエル・新井正人 (2012)『マリアナ諸島に残存する日本語』明治書院

ロング、ダニエル・今村圭介（2015）「日本語が公用語として定められている世界唯一の憲法—パラオ国アンガウル州憲法—」『人文学報』61-77（首都大学東京）

Arnow, Ted (1961) "Effects of Phosphate Mining on the Ground Water of Angaur, Palau Islands Trust Territory of the Pacific Islands" *Contributions to the Hydrology of Asia and Oceania; Geological Survey Water-supply Paper 1608-A*. Washington, DC: U.S. Gov. Printing Office.

Manuel [no surname] (2003) cited in Pacific Worlds Yap-Ulithi Website: "Colony" Pacific Worlds, www.pacificworlds.com/yap/visitors/colony.cfm

Krashen, Stephen D (1982) *Principles and Practice in Second Language Acquisition*. Pergamon.

Long, Daniel, Keisuke Imamura, with Masaharu Tmodrang (2013) *The Japanese Language in Palau*. Tokyo: NINJAL, www.ninjal.ac.jp/research/project/a/creole/files/creole_Palau.pdf

Palau Community Action Agency (1973) *A History of Palau Volume 3: Japanese Administration; U.S. Naval Military Government*, Ministry of Education: Palau

Rechebei, Elizabeth Diaz, Samuel F. McPhetres (1997) *History of Palau, Heritage of an Emerging Nation*. Koror: Republic of Palau Ministry of Education.

Trudgill, Peter (2002) *Sociolinguistic Variation and Change*, Georgetown University Press.

Wahl, Cecilia Hendricks (2000) *Number One Pacific Island*. Bloomington, IN: Woodcrest.

（Daniel Long・首都大学東京）

（いまむら　けいすけ・東京医科歯科大学）